

幸田文、前期作品の言語景観

——序説と語彙集成——

工藤力男

序説

わたしが幸田文の文章に初めて接したのは、大学を出た春に赴任した、名古屋の高等学校二年生の教室で、「現代国語」の時間に「紙」を読んだ時であった。四ページほどの短い文章に盛られた幸田露伴の精神、露伴によって培われた著者の素養に感銘を受けるかたわら、めぐりあった幾つかの表現在心が引かれた。

例えば「捨眼も利かして」、あるいは「出ず入らず」、この二つはそれまで耳にしたことがなく、いかにも巧みな表現だと感じた。また、使用済みの紙を「ごみ屋さんに浚はせる」

の簡潔さ、そして、「深思案」「気象を養ふ」「紙の脚」などの気の利いた言い回しに感心したのである。

ピアノの藝で宮家などに伺候した文の叔母が頂戴してくる、菓子を含む和紙の下に敷かれた「経木」が、生徒たちには理解できなかつた。彼らはそれを「うすいた」と言うのであつた。我が郷里の秋田市でもこれは経木なので、こんな物の呼び方にも、名古屋と東国とのあいだで違いのあることを知つた。

東京育ちの幸田文の使う日本語と、秋田に育つた自分の日本語の間の違いは、どんな物や事に多いだろうか、どのようにならうだろうか。そんなことを考えて、停年退職の三年前、国語学演習で「こんなこと」（新潮文庫『父・こんなこと』）

所収)を読んだ。案の定、学生には理解しにくい表現や表記、行動や習慣がいろいろ見つかって興味が尽きなかった。

その二年後、右の演習に出席した学生の大半が最終学年を迎えた平成十六年の成城国文学会の講演は、早稲田大学教授の秋永一枝氏にお願いした。そして、「東京弁のいろいろ」と題して話してもらうことができた。

わたしは、日本語について考えることを趣味やなりわいにして生きてきたが、幸田文はおろか、近代の東京語に関しては無智に近い。東京語について発言するには、多種多様の文献に通じていなくてはならない。文学者でも、久保田万太郎を筆頭に、宇野信夫、戸板康二など無数といえるほどの書き手の作品を読破しなくてはならない。三遊亭圓朝を始めとする落語も見逃せない。さかのぼって江戸時代の言語資料も、洒落本に人情本に滑稽本、歌舞伎に講談に川柳と、数え上げるときりがない。わたしはそれらにも特に親しんではこなかった。幸田文の言葉づかいに興味がある、それだけが本稿の作業につながる契機である。

幸田文は、芸術院賞を始めとするさまざまな光栄に浴した文筆家である。この人とその作品を対象にした評論も多いが、その文章の歯切れの良さとか、露伴しこみの教養とかへの言

及は多いが、大半が文学全集・文庫版などの解説で、内実は印象の表明でとどまることが多い。幸田文研究の文献目録を見ても、日本語学のたちばから書かれたものは意外に少ない。そこで、今の自分でも何か発言することができるかもしれない。そう考えて、少し試みの鋏を入れてみたものである。

*

幸田文の「紙」は、丸善の広報誌『學鏡』の昭和五十二年二月号に載った。それにいち早く反応した発言に、亀井孝氏の「文章といふもの」があり、その年の五月号に発表された。今は同氏のエッセイ集『ことばの森』(吉川弘文館 1995)で読むことができる。

亀井氏は、「紙」の冒頭から十行ほどを引いて、この文章には冗語的な表現が多いことを指摘する。「出ず入らずの手ごろな贈りもの」を始めとするそのたぐいを挙げたうえで、「ここが大切なことだが」と方向をかえ、この文章の美しさには、そうした表現が大いにあずかっているのだとして、「われわれ日本人は、このような文章のあやに心をひかれる傾向の強いこともたしかであろう。」というのである。

そこで亀井氏は、戦後間もない時期のある学会で国語教育家の行なった講演に話題を転ずる。米国の大学に留学した英

語教師が、作文の教室で、自身の文章を集中が足りないとして厳しく批判されたという話から、その講演者は、これからの日本人には集中が大切である旨を説いたのだという。講演者の戦時中の言動を快からず思っていたことも加わつての亀井氏の感想なのだが、「文章道の極致は、ことばをことばとして、ほんとに駆使しおおせることであろう。」と述べて、「紙」の冒頭はやはり「名人藝」だというのである。

近代日本の作家五十人の作品を選んで論じた、中村明『名文』（筑摩書房 1979）がある。ここでは、幸田文の『おとうと』冒頭の廿行ほどを引き、『流れる』を読んだ人なら、この作家の感覚描写がどんなにピンピンしているかわかるはずだと述べ、この引用箇所からも、作家の至情が「感覚的な表現によって生きいきと伝わってくる」と評している。その論述の結び近くでは、地の文も、姉「自身の体をとおして出てくる」、「東京下町の話しことばが地の文に続出する」として、「のろのろ とつとつと はす がむしやら 追い着かれちゃ 惨めつたらしい いっそ ほつといて なまじつか ……」と結んでいる。

本稿の意図に近い著作の一つに、林えり子氏の『東京っ子ことば抄』（講談社 2000）がある。平成五年一月から十二

年五月まで『銀座百点』に連載された短章と、『東京人』平成九年三月号に書いた「幸田文のことば辞典」を、「東京っ子ことばの親玉は幸田文」と改題して併載した書である。

その内の連載分は、「あいそがない」から「わけしり」までの八十八篇から成る。各篇の標題の語につながる語にも言及するので、扱った語はかなりの数に上るが、記述はごく簡単であり、「いんぎがいい」「さぶい」「ちゅっくらい」「ふるしき」「ふんずりかえる」など、いわゆる東京訛りへの言及も多い。

林氏は、幸田文の東京ことばの記述にあたって、池田彌三郎「久保田文学と下町ことば」（『言語生活』六十一号 1956.10）の四分類を参照したという。すなわち、(一)意味が分からず聞いたこともないことば、(二)意味はわかるが使わないことば、(三)かつて周囲の年長者が使っていたことば、(四)今の若い人たちは使わないことば、という内訳である。

林氏が対象にした幸田文作品は、初期の『父』『こんなこと』『ちぎれ雲』の三篇で、百二十の単語と成句を見出しに立てている。それらが秋永一枝編『東京語辞典』（東京堂出版 2004）以下、『秋永辞典』に掲げられているか否かを調べると、約半数が見いだされる。

林氏が参照した池田彌三郎氏の方法は有益だ、とわたしも考える。因みに、池田氏が久保田作品から拾いあげた語は、(一)が最多で五十五、(二)が三十四、(三)が廿二である。(四)は主に敬語のたぐいで前の三つとは少し質が異なるが、この数値の意味は重い。池田氏でさえ、万太郎語彙の半数近くが難解だったというのだから、幸田文の語彙がわたしにとって難しいのも道理だ、と言えそうに思う。

幸田文の使用する擬声語・擬態語の類は、読者が必ず注目すると言えるほど目につく表現である。水藤新子氏の「幸田文のオノマトペ——初期作品を対象として——」(『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』第四十二輯の二、19972)は、もっぱらそれを論じた一篇である。副題の「初期作品」は、処女作の『雑記』から、「作家としての転機を迎える作品となった」『流れる』までとしており、岩波書店版全集の第一巻から第五巻までに収まっている。そこで得られたオノマトペの用例数は九百五十三、異なり語数は七百三十五、やはり多いという印象である。しかも作りだされた語が多いから目立つのである。

市川孝「幸田文の文体」は、『講座現代語』第5巻「文章と文体」(1963)所収の論考で、『おんげん』(1956～57)と

随筆集『さるのこしかけ』(1967)中の二篇が対象である。「用語」「文の表現」「文の接続」に分かれる考察は、統計的な考察も含んでいる。用語では、擬声語・擬態語・俗語・比喩的表現に注目し、文の表現では、「文の長さ」のほかに、「不整表現」「中止の表現」「特殊な連体修飾」の考察が独自で、学ぶところが多い。

東京弁研究の第一人者の秋永一枝氏が、幸田文の言語について発言したものはさほど多くはない。代表的な業績の一つである『東京弁辞典』に併せられた幸田文の著作は、刊行時期の関係で、岩波書店版全集の第三巻までと、単行本『木』(1962)・『幸田文 対話』(1997)に限られるからである。

その秋永氏が『東京人』の平成八年一月号に書いた「幸田文の作品から あざやかに東京弁」は、幸田文の言語の特徴を説いて有益な四千余字である。例えば、明治期の東京下谷で過ごした父露伴の日常語が活写されると述べ、柔らかな随筆の中に小難しい漢語が顔を出すことに露伴の影響を推測している。故事、ことわざ、しゃれ、もじり、俗語の多用なども指摘し、久保田万太郎や長谷川時雨の作品に注を施すより難しいだろうという。

幸田家の父と娘のくらしの記録から見えてくるのが、新語

の創造、造語癖である。露伴の「あとみよそわか」はその代表であろう。娘の文は父の性癖を受けて、さまざまの新語を創作している。例えば「ロハニズム」、「あづき長光」、「直沈流」である。わたしにとって長く疑問であった、父の動作を言う「ゆかたをぢか」（以上、いずれも『こんなこと』）を、

今は「浴衣を直」と推読しているが、もとより自信はない。

晩酌の膳に対する露伴が、へらのような物ではがしながら読みかつ吟ずる膝の上の「落水本」（『みそっかす』）は、由緒ある漢語によるのか、落水という雅号によるのか、新しい造語なのか、遂に解けずにいる。

秋永氏は、「懐かしくて声に出したくなる。あの文章を文法的にみていったら問題は多いのだが、何とも言えないリズムがある。」とも書いている。幸田文の文章の負の側面を衝いた鋭い指摘である。そうした事象に着目したわたしの採録カードも相当の数に上っている。平仮名を多用する独特の表記法にも注目すべきである。語彙・文法・表記、これらの作業をせずして、幸田文作品の言語景観の正確な記述は完成しない。

なお、本稿を成すにあたって、『江戸時代語辞典』（頼原退蔵著・尾方尙編 角川学芸出版刊）・『江戸語辞典』（大久保

忠国・木下和子編 東京堂出版刊）などの辞書類を頻繁にめくったが、それらによって解けた疑問はごくわずかであった。この事実によっても、幸田文の語彙の特異性が知られると思う。

*

本稿の対象は幸田文の「前期作品」に限った。その設定について述べる。

著者の文筆活動は、昭和廿二年八月、父露伴の死をめぐる文章「雑記」を『藝林閑歩』に発表したことに始まる。四十二歳であった。以後、露伴のこと、自身の幼少女期のこと、身辺雑記の随筆を多作した。ここまでは、文筆活動の初期と称することができる。

やがて小説「黒い裾」「流れる」の執筆に至った。「黒い裾」は昭和三十年に讀賣文学賞を、「流れる」は昭和三十一年に芸術祭文部大臣賞と新潮社文学賞を受賞した。昭和三十一年には小説「おとうと」を『婦人公論』に連載した。

昭和三十二年に雑誌の企画で井川ダムを見学してその体験記を発表し、あるいは、東シナ海で捕鯨を見学して印象記を書き、翌年は鳴門海峡の渦潮を見に行くなど、ルポルタージュの執筆が多くなる。こう見てくると、「流れる」までを一

つの画期としてよさそうである。「雑記」から十年である。

著者の執筆活動を区分するにあたって、さらに留意すべきことがある。昭和廿五年四月七日の『夕刊毎日新聞』に掲載された談話「私は筆を絶つ」である。その翌年一月から『婦人公論』に「草の花」を連載しているのが、実際の絶筆期間は八ヶ月ほどに過ぎないが、執筆再開後の著者は、書くことに對していつそう自覚的になり、父露伴の思い出屋であることを脱したと考えることができる。

かくして、昭和廿五年四月までの初期を含む、処女作から『おとうと』執筆の昭和廿七年までを前期と画することにす

る。著者の活動を画するもう一つの契機がある。それは、奈良県斑鳩の法輪寺の三重塔再建への関わりである。昭和四十年八月に現地に住職から設計図を見せてもらって、その関与が本格的になったので、この年の連載小説『闘』までを、著者の執筆活動の中期として画しようと思う。

それ以後、著者は、三重塔の建設現場に足繁く通い、遂には現地に住み、建設資金を補うための講演を重ねるなど、さまざまな活動をするようになる。この時期を含む没年までを後期とすることができると考える。

本稿では、全集の本文廿一卷のうち、第七巻までを扱う。すなわち、初期を含む前期作品に限った。その理由は、本稿の投稿を予定している掲載誌の枚数制限による。

*

わたしの初めの試みは、『幸田文全集』第二刷（岩波書店2001～03）によって、自分の興味を呼んだ語——自分の理解を越えた言葉、徳川幕府下で洗練されたらしいしゃれた言葉、下町ぐらしを彷彿とさせる威勢の言い回しなど——を拾い上げることであった。次に、それを秋永辞典によって確かめることであった。まず全集の初めの三巻で試み、見込みがありそうだったら、残る二十巻にも探索の手を広げるつもりであった。

そうした作業で全集三巻から拾った語や表現のうち、「あとみよそわか」から「おもりがやせる」までの廿二語が、秋永辞典の「あゝお」の部、百四十八ページまでには見当たらなかった。それは、秋永氏のカードにはなかったのだと解釈した。いわば幸田文の独自語かと言えそうな語である。残る五百ページにも同じ比率でそのような独自語が得られるとしたら、二百語近くが拾える勘定になる。これ以外に、現代日本語として用いられることが稀な語にも目を向けようと考え

た。このようにして集めた結果は、幸田文作品の《語彙集成》になる、と判断したということである。

語彙に属するが採らなかつた語もある。いわゆるオノマトペである。それは先に紹介した水藤新子氏の論に譲つて、おむね省くことにした。著者独自の語が多く見えるが、語の形態から容易にそれとわかるうえに、膨大な数になるからである。

表記にもいろいろな特徴が指摘できるが、本稿では言及しない。

その文法の傾向は、語彙に次いで言及すべきことが多く、著者の文体に大きく関与するので、別稿を期したい。

語彙集成

【凡例】

一 底本は『幸田文全集』第二刷（岩波書店 2001～03）による。

二 採録対象は語・句・成語とし、活用語は基本形で掲げて、それから転成した語も含むものとする。

三 著作の多くは歴史的仮名遣いで書かれているが、検索の

便宜を図つて、現代仮名遣いに戻して排列する。

四 ひらがなが多用されているため、対象の語句の見つけにくいことがあるので、当該箇所を太字で示す。

五 見出し項目を含む箇所を適宜抄出して掲げ、所在箇所の巻・ページ・行を括弧書きする。行の位置を数えるには、作品の標題・章題・節題等を含まず、純粹に本文の行に限ることにする。巻序には漢数字を、ページと行序は洋数字を用いて示す。ひとつページに複数の用例があるとき、二つめ以下についてはページを省略する。

例 「あがりえ」の項 (1356-15)

例 「いけのこす」の項 (72124-6)

六 本文を引用するに際して、内容を要約した部分は括弧内に小字で示し、省略した箇所は括弧内に点線で示す。

七 複数の用例があるときは、三個までを出現順に排列するが、例示した箇所を筆頭に示す。

例 「つんがけ」の項 (4272-7 5272-13)

八 末尾に丸印（○）があるのは、その項目が秋永辞典にも立てられていることを示す。

九 掲出項目が秋永辞典の用例に採られているときは、その項目の末尾に二重丸（◎）をつける。

例 「うしめづかい」の項 (三103-14 六430-6) ◎

十 幸田文の用法と近似する明治期以後の用例が『日本国語大辞典』第二版に得られたときは、その書名を記す。

例 「いかれる」の項 * 「日本隠語集」

十一 その他、特に言及することがあるときは、項末に三角印(▽)を置いて、その下に記す。

例 ▽秋永辞典に「未詳」。

❖あ行

あいろ すわつてゐる己が膝からさへ**文色**が消えて行く。

(一1276-7) ○

あがりえ あがり餌をあさつてゐる鳩どもを見てゐた倉は、

(一1356-14)

あさしぐれ その日は朝しぐれの曇つた日であつた。(一132-13)

あずきながみつ 「小豆**ながみつ**」と斬りおろすしぐさをする。

㊦。(一118-15)

あたじけない 人様にあたじけないことはしないやつだ」

(一292-4 五166-6 167-4) ○

あだのぞみ もう一度い、妻にと、あだ望みに惹かれたりし

つ(六355-11)

あたびん 角樽の酒は一盞たちまち父を失笑させた。アタビ

ン保証つきの逸品だつたからである。(二338-5) ○

あつたら あつたら白行きも子供を産んでから痩せてしまつ

つ、(二54-12) ○

あつたらもの パイにするよりほかないが、それもあつたら

もので途方にくれてあたら、(七276-14)

あとがえる (犬は) たちどまつてきつと見、また地を嗅ぎ

してあとがえつてゐる。(六395-8) * 薄田泣菫「茶話」

あとばらやむ 「たッし**跡腹病**まないでもらひたい」(四321-

5) ○

あとみよそわか 「あとみよそわか」(一118-11 -13) ▽本

項のみ、出典でも太字。◎

あばれ さかなは暴れまへに食ひだめをしておいて安全な場

処へ待避し、(四279-4 -5)

あまかなしい たとへ苦難の想ひ出にせよ、想ひ出の**甘**かな

しい感傷は快。 (四120-2 五196-14 198-2)

ありがためのじ 主人は**ありがため**の字で頭痛のたねだから、

(五134-11)

いじよう 普通にやつてゐるとは云ひ条、なにしろ寡婦のおかあさんが奮闘してゐる暮しであつてみれば (三二四-
 四) ○

いかだ そばにはかはいい朱、緑、黒の茶筒が、いかだに置いてある、(四四三-七)

いかれる 佐伯臭いものが附いてまはつてゐる話だとおもふ。いかれてゐることはたしかである。(五二四-一〇) *「日本

隠語集」

いけのこす 生け残されたものの身になりややつぱり、せめて花なんか賑やかなほうがい、つて気がすらあ。(七二二-四

一〇)

いさいそく 父はぐづくしてゐた。たうとう居催促になつて、さすがに走つて書き、書いた分はすぐ印刷所へまはされた。(四三三-九) *三遊亭円朝「真景累ヶ淵」

いしかむ 乾いて行く布を見てゐるとき急にこはいやうに居

しかんだり、(一六九) ◎

いしかる 云ひたくて云へないものが、ゐしかつてゐたが、涙が塞いでゐる。(一二六-七 一二〇-一一)

いじよく 居職ゐしよくの主人を先頭にして主婦も自分の技術をもつてゐる、(六一〇-一二) ○

いたごと あつらへの桶はいさ、か痛事いたごとであるから、この話はお預けになつたが、(四七六-一一) ○

いたちのみち 田舎はふつりいたちの道だつたが、久しぶりにやつて来た (二二四-三) ○

いちらつ (家事は) 何事をおいても先づこれを一埒さつとかたづけろ。(一四一-六) ○

いつときしいつときのぎ 追ひまはしなみに使はれてゐるけれど、自分でも一時凌いつときぎだと云ふし、(四七一-一一)

いて ひどい凍ひやだ。何でもが縛つたやうになつて揺がない。(三三二-八 四四〇-八)

いとみち 糸道の明いてる明かないにか、はらず、聴いてもらふよりほかあるまい。(五二五-八) ○

いらつ 私はいらつて物干で桐の木をひつぱたき、広葉のお皿をとつた。(一一八〇-九 三四五-七) ▽秋永辞典は「いらう」

で立項。◎

いりこみ 夫は入込みの三等にまづぎよつとしたし、代りくくの若いインターンに少からず悪感情を持つたし、(六三六-五)

いれる さうあちこちに気が煎いれるやうぢや勝てないよ」(五四九-一五) *幸田露伴「夜の雪」

うらもすうも 灸所々々へ水を廻しておいて、う、もすうも

なく鋤きかへしちまふ (五132-13)

うきばしら 母は小さい子を浮き柱の前へ連れて行つた。

(二128-11) ▽秋永辞典は「未詳」とする。◎

うけ 物干には竿が二本、一本は受から斜に外れて鋭角をつ

くつてゐる。(二1300-10)

うしめづかい 牛眼づかひをしたくせに急に作り笑ひをした

り、(三1103-14 六430-6) ▽秋永辞典は「未詳」とする。◎

うちば 相手に食はれて影が霞んでしまふやうな、ごく／＼

内端な線の弱い人なのである。(六1198-7) ○

うつつ うつゝのやうになつてゐる熱の子どもは乾いた唇を

明ける。(五1104-1)

うるしいた 名札なかたがさがつてゐた。黒い漆板うるしに胡粉こで、楷書

だった。(七191-15)

うれう 弟の性格の弱点を掴んで、騒ぎもせず静かに憂ひて

ゐるのを知つた。(七151-16)

うるぬげごえ うるぬげ声といつて、中ごろの調子のところ

の音量が足りないたちなのださうで、(二190-7 249-10

二1161-10)

えごい 姦通の最後は、えごくも男の生首で始末してゐる。

(四389-13 223-15 五179-12) *坪内逍遙「春廬舍漫筆」

えずきぐせ 私は生母の死後、自分にはつきりおぼえてゐづ

き癖がついた。(二1103-4) ◎

えどる 十代とも二十代とも三十代ともつかぬ、てもゑどつ

た顔。(二342-10) *歌舞伎「四千両小判梅葉」

えんぜん 奥さまこの時ちつとも騒がず、「……」と嬌然えんぜんと

笑つた。(三133-2)

おうつり 名のある菓子屋の名のある羊かんなどをおうつり

にしたり(六151-5-6) ○

おおがな 石山さんとしても大家内おほがなだし、こゝより廉い間

代のところはまづちよつとないし、(四1144-8)

おおまがとき おほまが時にはよくないことが起ると信仰の

やうに思ひこんでゐた。(二1364-1) ○

おきかつて 大工なんぞ鉋屑の中へ切れ物をはふり出してお

いたりするが、あれは皆置き勝手といふものがほゞきまつ

てゐるから、(二142-16)

おきせうろう 居候のやうな、置候おきせうろうのやうな同居人がゐた。

(七370-14 -15)

おしぶとこ 鈍重な、ぶう／＼しい、押し太いにほひだ。

(二124-1 三151-7) *幸田文「父—その死」

おしょく このなかでお職は伊勢海老だが、(11321-6 11

120-10 303-2) ◎

おしょくけ 「形ばかりでございませうが、お食しょくけ気があるなら

赤の御飯一ト箸めしあがつてくださる」(166-14) ◎

おすべり 病気で二度一年生をやるお滑りさんだった。(三

19-4)

おぜせ 明治の末、大正のはじめには、まだ「おぜ々」とい

ふことが、ちひさい子どものあひだに遣つてゐた。(三

373-1) ◎

おせた 眼まましい席へ、縫目のぺつたんこにお庄せた去年の

著物を著て出れば(五144-7)

おせる ごとくに押せて後れた朝食のあとで、梨花は改め

てあやまる。(五260-15)

おたちぶるまい 先生の趣向だといふ御た発ち振舞のお菓子を

いたゝいた。(1120-14) ◎

おたんちん 米子のおたんちんは、このくらゐぎくつとした

釘を打たれるのが身の為といふものだ。(五186-5) ○

おちぐち 酒を運びだすには耳があるのだ。調子の弾んだ盛

りに出す、落ち口にだす、落ちきつて出す、(11397-11)

おちど 逃走とか家出とかは絶対の向うがはの越ま度であり、

(五196-1)

おっぺす ちびた竹箒なんかを(……)みりくと押つべし

よつたりするのは、(四513 41-8 六15-9)▽秋永辞典

は「おっぺしよる」で立項。○

おどす 学校友達に武者人形の鎧を専門に威す稼業の家の娘

があつた。(1110-13)

おどむ 水の底にはまだくいやな気もちがま濺んでゐたやう

です。(四216-12) ○

おにおにしい が、股の力足を踏んで出て行つた、——鬼お々々

しげに。(四346-6-8)

おはづけ お葉漬も手薄く醤油樽一本だけ、(五138-1)

おはむき 無責任なお歯向きの口一ツで容易に翻弄されるの

に、(156-1 五129-9) ◎

おまじり 指示に従つて流動食・おまじり・粥食・普通食に

分けて、(七232-1) ○

おもおも 洋装本がぎつちりと並んでゐるのは、見るからに

重々としてゐるが、(11363-3)

おもしろづく 子供のほうは、おもしろづくから毎日新しん顔が

殖える一方で、(四129-7)

おもにこづけ 不器量だと背せまで重荷に小づけになるもの

なんだわ。(五131-1) ○

おれなみ 折れ波のあちらは随意な三角の頭が出はひり、随意に重なつてゐる。(六321-7)

❖ 行

かかりうど 最近かへつて来た出戻り親子で、かゝりうどの身の上などは、(二358-2) *坪内逍遙「当世書生氣質」▽秋永辞典に項目「かかりむすこ」あり。

かかりこ かゝり子のない老人なので引越ははなはだ億劫でもあり、(四144-7)

かかりびと 六十を過ぎてこゝへかゝりびとになつてゐる境遇だつた。(六110-13)

かけかまい 財布の中味もかけかまひなく、やたら口を利かしてはたまらなう。(一54-11 三104-2 五18-7) ◎

かけすずり 主人の懸硯から現金が少し紛失した。(三201-14) ○

かこう お茶に來なかつた白い人の群が、いまや重なりあつてベッドを囲つた。(七261-14)

かしずき 童女歌子の昔ながらのやさしいかしづきを得て、

安泰だらう (一159-14)

かしわ 毛布を背から廻してか、し、はに包むと、毛布の端を自分の腰の下に敷いて (五84-10)

かずけどころ 好んでしばられた縁ゆゑ、どこへも身のかづけ処はなし、(二119-6) ◎

かずける 褒美にも礼にもかづけるものは何も無い。(一197-5 一132-12)

かすまえる (水車の音) ことん、ことんと数まへてゐて、はじめて並木の松の声に気づく。(六311-5) *二葉亭四迷

「平凡」
がせい さういふがせいな働きのできる健康を恵まれてゐるから、(五339-4 六338-8) ○

かぞえび こんな数へ日の急ぎしことをよくやつてくれましたよ。(五140-2 146-12) ○

かたがた 人形の深けるはずはないけれど、その面輪は堅がたと締つて瘦せた。(四385-9)

かたそげる 片方は明るくなり得ない苦渋な状態に片削げてゐる。(三165-9)

かただすき 襷も十文字に取るほどのことはいらぬ、手拭取つて片襷で十分だ (一137-2) ◎

かただより 手紙はあるとき片だよりになつてしまふといふ
ことを、(1164-15) ○

かたみがわり 聖句は先生と生徒が一句づゝかたみがはりに
読み進む。(1112-8) ◎

かつてつんぼ をかしいのは勝手つんぼである。突然聞えな
くなる。(1238-1) *高見順「故旧忘れ得べき」

かでし 近処の清元だか常磐津だかへ蚊弟子に通ふ頃合で、
(1139-15) ◎

かとうぐち 卓をはさんだ無言。瓦燈口が明いてじ、みな女中
の進める膳。(1396-12)

かない 石川さんとても大家内だし、こゝより安い間代のと
ころは (四144-8)

かなつんぼ 私はかなつんぼだが、つれは心得があつて、
(1258-6) ○

かね 父はこぼしの縁に知にひつかけた人差指に力を入れて
ぐつと抵抗した。(123-7 1207-1)

かぶと 商売物の樽の呑口をひねつてゐた。かぶとのお客へ
使ふコップで (1204-14) ○

からがえり どれだけかはかならず釣れて、まるくおみや
げなしの空帰りでないとおもふ。(六159-11)

からきり 「からきり意気地が無くなつた」と歎くのも無理
ならぬことである。(1236-2) ◎

からせいせき 情実上の空成績であるとして気がつか
なかつたのか。(119-10)

かるこ 大抵の荷がかたづいてゐて、それでもまだ働いてゐ
る軽子もある。(六141-10) ○

きあたり あつと直感した。「あぶない」と気当りがしたの
だが、(四256-9 11429-13)

きがさ 無気力なものと気がさなものと、いづれに鞭は痛い
か知らないが、(124-5 1369-2 六164-5) ○

きかせ くだく／＼と聞かせをならべたて、寝巻にかへた。
(五27-2) ▽秋山辞典は「きかせに」で立項。○

きぐみ 新しい気組のせいとか、おやと思ふことにはかりぶつ
かる。(四56-10) ○

きぐるみ 黒い羽織も手綱染の袴も著ぐるみ脱いでやつた
ら、(1197-6) *宮嶋資夫「金」

きけもの あれがびしやりとわかるなんて。利けものついで
ふんでせうねえ、(五261-2) ○

きしばなれ 土橋さんは青ざめ、その眼は岸離れするほど見
開かれ (195-10) ▽秋山辞典に「未詳」。◎

ぎしやばる 孫もとしよりもぎしやばりかへつてゐる。(二)

138-2) ◎

きずみ 臥たぎりの床からきずみで菟蓐の葉を見てゐる。

(二1146-12 一289-5 五290-8) ▽秋山辞典に「未詳」。◎

きなじみ 糊が強すぎて二日目にも三日目にもまだ著なじみが

がわるく。(二198-5) ◎

きばたらき いちばん大切なのが氣働きといふことのやうで

す。(六92-13 271-5) ○

きぶつせこ 云ひやうのない氣きぶつせいであつた。(二)

7-10 二184-7 四231-14) ○

ぎようぎ 物を行儀に置くことも、行儀を外して置くことも

じやむ (二119-3)

きよげ どうせまじい葬式でも、なんとか浄けにとりつくろ

つて送らた。(二147-1)

きりあがる 魚市場は早くに切りあがつてしまふものだつた。

(二165-8) ▽秋山辞典の同項目は同形異語。

きりぎりすばこ 塀のあちらはビールの空箱 酒醬油のきり

ぐす箱が重ねてゐる。(五120-13)

くえる 枝の揺れるごとに乾いた土がぼろ／＼と潰えてゐる

つとだらう。(二1206-7)

くぎになる 日常の些事やことばが、なか／＼しつかりした

釘になつてのこるものだ。(二1187-12)

くずおれる 一年のストックは持ち重りがしてきたが、私は

かへつてくづほれなかつた。(四180-10)

くちあけ 子供たちの商ひの口明けの訪問に会ふわけなので

ある。(六47-9) ○

くちつぱじけ どんな口つぱじけも我慢して聞いておいてや

る」(四378-9 五198-13) ○

くもになる ——私は蜘蛛になつておじぎをした。(二1333-

15)

けいまずじ おまへはどうも桂馬筋に感情が動くやうだから、

(二137-8 五348-3) ◎

げしよう (もらった小猫について) 下性がよくないのだ。

(二1334-7) ◎

げとう ごみ屋と屑屋の意趣晴らしなどの話を聞かされても、

事柄の愚劣、話しぶりの下等さにひつか、つて。(二1201-

14) *加藤祐一「文明開化」

けぬきあわせ 住みついて安穩をはかりたい心と、どこも

こ、も捨て、先へ先へと誘はれる心とがけぬき合せになつ

てゐるのを、(二139-3) ○

けぶり 彼はなにかを窺つてゐるけぶりがあつた。(六309-5)

四(160-13) ○

けわう ニタ間の障子がいつしよに明いて、美しく粧はまつた首が二ツつき出た。(五5-4)

けんどんおしいれ 仏壇の脇のけんどん押入に何本かの刀が

あり、(二107-4)

こ 大桶に漬けた大豆まめだ。染物のこにする大切な道具なのだ。(二16-13) *東京日日新聞

こうげいた 身のまはりには塵取・こうげ板・敲き鏡が引き

つけてある。(一159-5 - 6 156-3) ◎

こえやけ つかつた部分の足は、短時間にもかゝらず真つ

赤に肥こえ焼やけして、ぴり／＼痛いと云つてゐた。(二141-4)

こぐらかる 一人余計ならそれだけこぐらかりが多い、(五

249-1)

こころいれ 蓋には千代のイニシアルが彫つてあつた。桂子

の心入れらしかつた。(二141-13) ○

こころゆかせ 話してゐるだけでも染香には心ゆかせの時間

なのだ。(五274-9) ○

こすい 「つめんなさむ」とわびると、すぐこすくつけこん

びきた。(五380-6) ○

こぞうだち 彼はさかな屋、小僧立ちからの腕はさえて、

(一301-8)

こぞつぽい 私のなどは合赤あひあかの三枚が、さねになつてゐる始末だから、まことにこぞつぽい著物である。(六109-8)

こたくる 思いのたけをこたくつてゐる事くらい、詩から遠

いはなしはない。(六152-11)

こづけ 重荷に小づけで不幸な上に後悔までしよひこむのはあるまいか。(四54-6) ○

こつたく 土間がこつたくでいつぱいに散らかつてゐるやう

な時も、(三391-4 六314-1)

こつぶう たしかに二子山の谷の洞窟から吹きだす劫風こつぶうのや

うだ。(二227-9)

こどりまわし 万事小どりまはしで手ばしこくて、(一

368-5 125-4) ◎

こぼしばなし 直属の上役に子供の病気のこぼし話をしたさ

うです。(七304-9)

こまい 一樣に裕福とは云へないこまいな生活だから、(四

353-5 一173-11 -14) ○

こまかしい もつと細かい含みのある用事もしてくれる。

(五53-5) ○

こまぎる 盗んだ金を小出しにこまぎるといふかけひきをや
 したやうな。(11203-6)

こまける 三味線なんかまちがつたつて、こまかせばこまけ
 ちやふんだし。(五177-15)

こようば 「どうもお小用場こようばをよこしまして」とお詫びにな
 る。(11230-7) ○

ころ 目録のまんなかころへ雑の雑々犬一頭と書けばい
 うと思つた。(六435-5)

こわらしい 母の顔はこはらしいものに引つ吊れてゐた。
 (七65-6 六187-10) ○

こんごんごま こんごんごまやら零余子むかひやらがびつしり纏ひ
 ついてゐる鉄網かなあみじきりであつた。(11299-6)

❖ き 行

さいそくしまた げんのやうな齡ごろの娘だと、すぐに悪口
 の種にされる。催促島田とひやかされるのだ。(七236-11

237-10)

さくだつ あれも少しこれもぼつちり乍らいつも整然とさく

だじつ。(1161-7)

ざっかけない つめたいコロツケは脂臭あぶらく葱臭ねぎくざっかけな
 い味あじがする。(五103-7) ○

ざっぱくない 自分がざっぱくない起きかたをしてゐるやう
 に思つた。(五212-2)

ざどる 手の甲に少からず縦皺が寄つて、老人斑が一ツ二ツ
 茶色にざどつてゐる。(五274-8) ○

される 三年もあるじの倚らない机は、沢つやを失つてされてゐ
 た。(一77-4 11299-9 四296-4) ○

ざんぐり 父の方から云はせれば、「ざんぐりとやつしたの
 こ」とさふ。(1187-6 -10) ○

し 云々のことばが駟しもまた及ばぬ早さでひとの耳に駢しけつ
 けたとしてゐる。(115-15)

しお 眼のしほに愛敬あいきやうがあつて、活潑で、人馴れてゐる娘だ
 した。(11200-1 36-4 五174-2) ○

しおらしづら 犁すきこまれる雑草の花としをらし面おもてをするの
 もいゝけれど。(156-11)

しおる (牡馬の声を聞いた牧場の牝馬は) びくと耳をし折
 るじやへ。(六193-13 七397-4)

しかむ 薄桃色の著物はベそをかいてしかんだ。(1320-2
 361-15 1149-6) ○○○

- したい 礼儀正しく一ト足毎を式体しつ、やうやうに妻に
 並び、(11369-1)
 しいげ (駿河台の坂を) 降りきつたところはいつそう人波
 が繁かつた。(7183-9)
 しこる 陰謀の不安と荷担の恐怖がずしんと重くし、こつて
 (1169-1 279-12 四384-3) ○
 しこん 先生の重さはぶわくとしつ、かつし、こんとした
 固さで、(1150-15) ◎
 したじっこ 貧のために娘を下地つ子に貰つてもらつたとか、
 (11105-12) ○
 したみいた ときにはしたみ、板の裾へ逃げてゐる鼠に腹をた
 てて、(16401-4) ○
 したる 著物も髪も霧を噴いたほどにし、とつてゐる。(四
 211-2) ○
 しなしな 娘のはうは訊いたはうがてれるくらゐ色つばいし、
 なでしなくとして(11356-5) ○
 しにじゅうばい 「死十倍、あるいは五十倍百倍と云つて、
 親父の死ぬ日を期日にして証文を書く手もある」(11333-
 7)
 じのし あらためて地伸しからしたが、は、のすることはた
 いへん丁寧じ、(1195-12)
 じぶくる 腹を立てる、泣く、じぶくる、歯を剥く、(一
 127-3 1156-8 140-5) ◎◎◎
 じぶり 音をたて、渡つてきて、すうつと地降に収まり、
 (四280-8 329-15)
 しばれでる すわると一時に、からだ中から汗がしばれ出て、
 (1283-13)
 しばれみず 少しづつ、絶えずさして来る絞れ水をか、へてあ
 る気で、(四34-5)
 じみず 雨戸を立てた縁さきをすでに地水がとりまいてゐた。
 (四284-5 34-2 277-6)
 しもげる 正月の染香にしもげた古著でゐてもらひたくない
 氣もちがあつた。(五155-15) ○
 しもたや 今戸河岸には倉庫としもた家が建ちならんでゐる。
 (1156-8) ○
 しゃくう あるときは水れんの鮎をしゃくひ出して、はねる
 やつを盆に載せ、(1144-3) ○
 じゅう 一年病めば一年、病んでゐる中全部が看病であり、
 (1153-1)
 しゅもく (土橋さんは) 私と撞木に長々とのびてしまつて

みた。(175-10 11142-9) ◎

しよくかた 息子が又あまり類のない職方しよくかたで、大工の使ふ墨壺をつくる(170-6) ○

しよくづく 長い病人を人は忘れてみた。そしてやつと食づいてきた。(1684-11) *「改正増補和英語林集成」

しよふで 町内会の寄附は初筆しよふでを持つて来られるといつたものである。(530-3)

しるしまえ まはしのやうに幅が広くて、まんなかに酒のしるしまへがでかくと印刷してある。(1351-15) ◎

じれたつ 岩のない岸へ砕け波はじれたつて砕け、(1631-7)

しわる その辺の物にしがみついて引きずられまいとし、唐紙がしわつて指は無理にもぎ放され、(191-1) ○

すえる 去年、おと、しの古い汗が畳まって籠すえている。(11270-5)

すがり 「すがりの味、尽きた味」ともいふべき好もしくなさだつた。(1276-11)

すがれにこう 足腰の起たない老人のすがれ二号、すたれ妾と噂してみた。(113-15) ◎

すがれまめ 秋の十三夜さまにあげるすがれ豆に至るまで、

(1163-9)

すけでつぼう まはりから助鉄砲を打つてやらなくてはだめなんだ(17189-5) ○

すける 月給全部を母へ助けつゝける手筈である。(41288-12) ○

すさる 父の心は身をすさらせたいやうな哀しいおそれをもつて聴いた。(1159-9)

すたれめかけ 足腰の起たない老人のすがれ二号、すたれ妾と噂してみた。(113-15) ◎

すてうえ 季節外れを自転車で捜し、捨植糸に残つてゐたのを辛うじて一本持つて来てくれた。(11146-11)

すてめ 起つて行き際にちらりと捨て眼を置いて行く癖をおもふ。(1170-13 1130-4)

ずぼんぼ どたばた騒ぎのなかでは、ずぼんぼが最も子供たちには人気があつた。(1184-9) ◎

すやす 歯切れの悪いへまをやつては、物をすやしてゐるが、(4253-13 252-14 1267-10)

すんぼうのび その鏡は私の嫁入支度の一ツなのだが、寸法延びでまぬげに大きかつた。(5359-8)

せき 金槌を揮かつて腕を動かすせきはないのである。(5

118-15 154-6 六(385-12) ○

せしめ 戦争で焼けてゐるからほとんどせしめは利かなくなつてゐる。(四334-10 116-1) ◎

せつちよう 例のつるんとした顔つきで、土間にいけた藍甕のせつちやうをはじめた。(1231-5) ○

そう 頭は総そうに立つたやうにざわ／＼と騒いで、しかも空であつた。(1297-6 四260-4)

ぞうじてんばい 今また新たに勇猛一転しなくてはならない。

造次顛沛そうじてんばい、前進々々。(1140-13) *吉岡徳明「開化本論」

ぞうずみ いづれにせよ雑炭ざつたんぢやない、老来円熟してさくら

炭か、いよ／＼堅い椿炭か。(1318-6)

そくに 後ろにけはいを感じてふりかえると、フェスがそくに駆けて追つて来たのだ。(六384-14)

そげもの 私は(……)いはゞ世のなかのそげもの、です。(1214-5)

そげる 持てるものへの片意地な、そげた気持が底流れして

ゐて、(1194-6) ○

そこながれ そげた気持が底流れしてゐて、とかく批判的な眼になりがちだつた。(1194-6 五271-2 六172-12)

そぞろ 乱されることは、にも隠したいそぞろな快さで

あつた。(1158-13) ○

そば もう野を行き岨そばを行きして、露のあるうちに山の野菜を集めてゐる。(六60-8)

そばたれる かまきりが露にそばたれて、ころりところがつてゐる朝もあつた。(1111-2)

ぞろつぺい 大丈夫ですよ奥さま、ぞろつぺいなことはしませんよ。(四59-1) ○

そんがたつ 自分までが云つちや損がたちます」と云つた。

なるほど、損がたつ勘定かな、(四6-7) ○

ぞんき ぞんきなデパート家具だから狂ひが来てゐるが、(五260-13 六278-11) ○

◆た 行

たいき 感涙会の招待文は大気なこの人でも気になると見えて、(五289-8) ○

たがにはめる 組んだ手を擁に嵌めて両膝を抱き、(1189-9)

たぐまる 胸のあたりもごちや／＼とたぐまつていやなかつた。ちだ。(五54-8)

たしない 炭も配給の足たしなさながら、その日はとつておき

を使つてゐた。(11398-3) ○

たたまる 去年、おと、しの古い汗が畳まつて饅すえている。

(11270-5 四13-1) *宮崎湖処子「帰省」▽秋永辞典に連

用形による名詞「畳まり」あり。○

ただらあそび こゝとも利かないし、遊びはだゞら遊びにな

る。」(7147-7) ○

たちは さうおまへへのせいににされては立端たちばがなかつた。(一

58-10)

たちまさる 「このひとの心のたけは立勝たちまさつたなあ」(六292-

4) ○

たて 演芸会にはかなりな立たてを弾くことになつてゐるのに、

(五262-5)

タフタ 一番のお職は幅広のタフタで、紅や薄紫の薔薇の花

模様が浮きだしてゐた。(1120-10) *幸田文「みそつか

す」

たべつく いつまでも細い食事だつたが、この部屋へ来てし

ばらくすると、たべつてきた。(六386-8)

ためなみだ 石山さんは泣いてゐた。溜め涙といふものだと

おもつた。(五331-10)

たもとくそ たいていは袂たもとくそなぞで自分療治をやつて、あ

げくに化膿したりしている。(11240-9) ○

だんだんぶか 思ひかへしてみれば、かうした段々だんく深かぶの気も

ちが、(148-15 103-5) ◎

ちかまさり じみなのに博士だなどとはでなあ、だなを貰ふ認

められかたをしたのだから、近勝ちかまさりのする底光りのじみで

ある。(四182-2)

ちからぐい 垣根はところぐにに力杭ちからぐいが残つてゐるだけだつ

たから、(四308-3)

ちくじやく 訳をしてくれたが、それがひどい逐字訳で、

(1131-15)

ちよくちんりゅう 泳ぎができなくてもやれるといふので、

直沈流ちよくちんりゅうの私は(1132-10)

ちよろつか 私にはちひさい時から、ちよろつかな、ふたし

かな処ががあつた。(1132-1 134-1 317-3) ◎

ちらける 台処は鍋も筈もぞんぶんに散らけてあつて、(三

398-1)

ついつたけ 一枚の方はたつぶりしてをり、もう一枚の方は

ついつたけの裾短だつた。(1149-4) ○

つがえる 「ではあしたから来てね」とことばを番つがへながら、

(四56-7)

つかれあし 若い日に歩いて感じた疲れ足の生理的な感覚を

思ひだしてゐる。(一六二-13)

つきあたり 地味は粹のつきあたりといったすすきりした様

子で、(一六4-14)

つきいき つき息のときは正調で、引き息のときはうら声で

しゃべるのだから(五37-4)

つきせん 父は例の印伝をのろく引つぱり出して、突き銭

なんかで勘定をする。(一375-5 375-6) ◎

つぐなむ 讚美歌で立つたり祈禱でつぐなんだりする度に、

ぶうくだ。(一1227-10 353-10 五42-9) ○

つくねる 場末の染物屋さんの棚隅に廢物としてつくねてあ

る染見本(一1325-9 六298-2)

つこのつ 白い足は草履の鼻緒の濃い色をはつきりとたすき

にして、袴の襷の角々から見えたり隠れたりした。(七

337-8)

つめだつ いやにひつからまれたり角目だ、れたりした。

(一1283-2) ◎

つめぎし 油気のない手は、さつそく爪ぎしに深いあかぎれ

の傷を受ける。(七89-11) ▽秋永辞典の「つめぐし【爪

際】」の項に、「爪のきわ」と解き、「つめぎし」ともこう

か。」とある。

つりえぼ (耳のうしろの毛の) 生え際には吊りえぼ、がいく

つもできて腫れてゐる。(一193-7)

ていがくとう 影がすうつと暗くなつた。定額燈だらう。

(一1342-13)

てかきものくしい手唄きで、掬はれるやうにベッドに移

されると、(七192-4)

てがわり 娘も外へ出てゐて、私ひとりだつた。誰か手代り

があれば、(四251-13)

てしよう 理路整然たるものだつたが、たゞ一ツ手証を見て

ゐないのが弱みだつた。(一1202-6) ○

てず 私は大急ぎで、はるか川下の出洲の棧橋へ駈けだして

行く。(一1167-8) ▽日本国語大辞典に立項するが、用例は

なく、「砂嘴(さし)」の義とする。

てずいらす 清々しい出ず入らずの手頃な贈りものだとおも

ひ、(六130-9) ○

てついで 孫の分を手ついでにト洗ひなど苦にはならない

人である。(五1329-2) *「和英語林集成」

ても 十代とも二十代とも三十代ともつかぬ、ても多どつた

顔。(一342-10) ○

テリ 縁づくときに桑の小机をこしらえてもらいました。こ
くわずかな筆返しの特リがあるだけで、(二1303-1)▽日本
国語大辞典に立項せず。

てんがけ 原稿を作つて読むのでなく、メモでてんがけに話
さうとするのだが、(七272-7 五272-13)

とおどおしい 血は女の生理に近いものなのに、近くにゐな
がら遠々しくしか考へてゐない(六28-15)○

とぎぬける 裁物庖丁ももう磨ぎぬけたといつた具合に薄く、
(二1357-8)

とぎをふく おもむろに両翼を揚げておいて、ばさばさつと
やつてとぎをふく。(二216-2)

ところ 二十歳を越えた青年は、共同井戸に米をとがされ
てゐる。利心も文才もへつたむくれである。(二39-3)

とこみせ 小商ひの店は資力も才覚もなくでとこ店しか借り
られませんでした(二389-11 四200-10 六329-5)○

とじっくい 束髪にした髪のかたちも年つ食ひに見えた。
(二1103-7)◎

としばえ もう、男に勤めようとする齢へにいつかなつて
ゐるのだつた。(六309-3)*幸田露伴「新浦島」○

とっこにとる 実体をちゃんと知りきつてゐるくせに人の評

判をとっこに取つて、(六381-6)○

とばくさ 「これで何でも大騒ぎにとばくさしないでも済
む」(一204-2)◎

とばつく あたしやことしはとばつちやつてね、新年の挨拶
なんて誰にも云ひそびれたよ。(五172-9)○

とめ(鶉は)羽搏く。実際、勇壮だ。きらつとした利眼だ、
(二1216-1)

とりとまる しごとにか、らうとすると、おちついてゐない
ことがはつきりした。勢ひたつてゐるくせにとりとまらな
いのだつた。(六28-1)○

どろぼつけ 折角よこれなく産みつけてもらった著物は泥ぼ
つけになつたが(一199-4 303-12)◎

どろろぐ 一匹の犬が来て伸びてゐた。一見、全身膿みと
ろろぎ、病犬だ。(二221-5)

とんがらし とんがらしを舐めたやうな、痛い熱いどきど
した気持(二160-6)○

どんつく どんつく布子なら縫ひます、柔かものは縫ひませ
ん(二132-14 389-7)◎

どんもり 私はどんもりみたいに、抗議しようとしても云へ
なかつた。(六48-3 一372-9)○

◆な 行

ないふく お医者様とは噂通りに随分内福なものらしいと、
(七305-9)

なきえぬ 私はなんでゆず子の萎え衣を蔑んだのだらう。

(三110-10)

なきあげる 眼ばかり私の腰のあたりをじろつと薙ぎあげて

見たくせに、(三103-8)

なさけらしい ゆかたを褒めれば、これは肌よだに情なげらしい著物

だといふことだ。(五320-7) ○

なじみがいい なじみ甲斐に私が助手すけに行つてあげました。

(六295-14) *徳永直「太陽のない街」

ななどこはぎ 露伴家は富裕でない、肩あて・裏打・七とこ

継ついでではあつたが、(一46-14 三330-8) ◎

なびじん (七重の語り) 名美人なびじんだなんて蔭口まできかれる

くらゐでした。(七298-4)

なめられ 鯨うづや鱗はなになめられると、つるんとした顔になつち

まふ、それをなめられといふんださうだ。(二1225-11

-10) *幸田文「糞土の牆」

なりがわ 長い袂に袴を穿かいて鳴草なりがはの靴を踏んで歩く女学生

姿 (三19-4 17-2)

なんどり あ、いふ手合てあひに持つて行く話は、なんどりとやら

なくつちやいけない (五193-9 199-14 281-4) ○

ながつどう 壁際に書棚だけ、縁側寄りに二月堂の机一ツ置

つて (六286-2 -11 287-3)

にくつぐち いえ、孫まごの憎にくて口なんかどうでもいゝんです。

(五331-6) ○

にざいりよう これから荷宰領にお膳を出すのだと云つた。

(二165-11) *安藤鶴夫「巷談本牧亭」

にたり 摺れちがつて下る荷足にたり、横切る渡船わたし。(三156-8 七

155-13) ○

にゆうばい 入梅がもうあがりさうだといふときに、(七

220-7) ○

ぬけさく ばかんと抜作にその置場を忘れてゐるのである。

(四266-5 -7) ○

ねがつて このときまで父は右下が臥勝手だつたのが、(一

70-5 255-4)

ねこつけ いつもひけめのもとになつてゐる猫つ毛をまざる

られて (三149-4) ○

ねこめでごえ つくり声ではなくて、しんからの猫賞ねこで声に

なつてゐるのだ(四196-2)

ねつきうち 私は独楽廻し・ネッキ打ちまでした。(二111-

8)◎

ねつきりはつきり 同じ汗なら根つきり葉つきりこれつきり

の汗に、(二1162-7)◎

ねつこい 例の割れ声をわざとひそめて話すねつこい(二

197-10) *里見弴「桐畑」

のたれる 病んで起てない父といつしよに、どこで焼け死ぬ

か、のたれるか、(一80-14)

のところ 私はむつとして横を向いた。の、と、ろに平つたい神経

でないと負けると気をつけながら、(二1198-10)○

❖は 行

はちびらき 一見して病身とわかる、鉢開はちびらきの頭をもつた少

年工である。(六398-14)

はつみち 駅からは一本道で(……)、はつ道でも手間なし

に来られる、(六310-5)

はながしら 紫菀は花がしら、を重くしてやつと立つてゐます。

(五418-13)

はなつぱり 依怙いこち地なくらゐの鼻つぱりの強さがあつた。

(三127-13 四184-11)○

はやのりもの いつ東京の空で早乗物に轆かれる廻りあはせ

になるか知れず、(五344-6)

はやま はじめはことんくと、そのうちだんくと早間はやまに

と、と、と(七309-6 342-10)○

ひあわい 倉へ通ふひあはひで停滞して何かしやべつてゐる。

(一158-12 五118-14)◎

ひかた 痩せた骨の上に皮がゆとりなく引つ張れててかく

し、耳が薄く立つてゐる。火形の相である。(二84)▽第

二拍は濁音のガか。

ひきあけ そんな夜のひきあけどきの土手道は、(六154-7

166-11 -14)○

ひきいき つき息のときは正調で、引き息のときはうら声で

しゃべるのだから(五377-4)

ひきのこり 引残りの多いうちにはちくりといやみの一ツや

二ツは云ふのである。(五135-6) *歌舞伎「月梅薫籠夜」

ひぞりあい たがひに意地の張りあひひぞり、あひをして、

(五252-14)

ひざりごと 悪口やひざり言を云ふなら、(157-14) ◎

ひだつ 睡るといちはんよくひだつ、んです」と云つてゐた。

(4126-10)

ひたに 真夜中にかゝらうとして、ひたに静かに、ひたに冷えて、(11383-7)

ひだりば 小刀は左刃であつた。(1136-13) ◎

ひっぱれる 瘦せた骨の上に皮がゆとりなく引つ張れててか

くし、(118-3 1187-10) ▽秋永辞典には五段活用としてあげる。

ひとざざなみ 後家根性なんかは母親に属する一トざざ波だが、(46-13)

ひとちようば 私の住ひはもう一ト丁場さきだから、(三

205-9) ◎

ふうつき 町育ちのすつきりした風^{ふう}つきがあつたからである

し、(4311-15) *二葉亭四迷「浮雲」

ふかつく 男には体のまはりにひらつくもの、ふかつくものがないから (4208-2)

ふきしおる 問題が一人一人に配られ、吹きしをられるやう

にどの子も机にかぶさつた。(115-14)

ふけあじ 料理には上手下手にかゝはらず、若味^{わかめ}とふけ味が

つくもののやうに思ふ。(16199-3)

ふさる 芳の小屋がまつ暗に臥^{ふさ}つてゐるのを透^{すか}した。(六

158-12)

ふしょう (母は) 気の強い人だから、さつさと不承してくれたのだとおもふ。(1110-2) ○

ふたの 男の子はなんにもなしのスツポラポン、女の子は二

布形式だつたから (11242-1) ○

ぶま どつちも無理のないぶまな形だつたのだと思ふ。(一

38-7 五390-1) ◎

ふみひろがる (新調してくれた靴が) 村育ちの踏みひろがつてしまつた足には (1146) ◎

ふり まつたくのふりの薬売りだつた若者の方には、執拗な

押売りに罪があり、(1230-11)

ふんし (拾い犬の変化について) 当然のことだが糞^{ふん}仕^しがき

れいだつた。(16391-15) ○

へつたむくれ 青年は、共同井戸に米をとがされてゐる。利^と心も文才もへつたむくれである。(1139-3) ◎

へんがえ みんながいゝだとか悪いだとか、てんでが今云つ

たことをすぐ変がへして、(149-11) ▽秋永辞典に「へん

がい【変改】あり。

ほきだす 弟は十分間を置いて沈黙してのちに、ほきだして

云つた。(七115-13) ○

ほきたつ 垣には蔓物が纏ひついでゐ、毎春枸杞は勢ひよく

ほき立つて。(1108-6 1153-9)

ほける このごろはぐづぐづのろくろくしてゐる。惚けたと云

はれると(四13-9 1-10) ○

ほつくい (乾燥いもを) かみかみ行けば道はほつくいの歯

に凍てていて。(五335-7)

ほまえかけ その帯の腰へ、その着物の膝へ、楯の如くギブ

スの如く遮断扉の如く、ぎりつと帆前掛(はまへか)がか、つてゐた。

(1350-2 四200-13 201-10) ○

❖ ま 行

まがなひまがな あれほど好きで間がな暇がな読んでゐた人

が。(1-6-2) ○

まぎざつぼう (刻んだ大根) あちらのは新ぎざつぼうのやう

に太くて、千六本はせいぐ十六本程度である。(四304

7) ○

まぎり 続いて間切りく、泡立つた鮮かな色は押し出され

た。(1255-6)

まじりまじり その楽しみを投げて、まじりくとしてゐた。

(1-6-2) ○

まどかけ 窓かけを引かない大きなガラス窓から、(七264-

13) * 「改正増補和英語林集成」

まな) 姉や弟とともに私もまた愛子であつたのだ。(1158

-9)

まるまつちい 浅黒いまるまつちい手が篋でしゆつとしゆく

と。(五337-9) ○

みごうしゃ どんな見巧者な人の眼にも何歳だかわかりはし

ない。(四283-6) ○

みざめ よく見るとその色は見ざめのしない染めあがりを見

せてゐます。(六99-7)

みじんまく 自分の身じんまくは自分でおしつて云ふんだ」

といふことになつてゐた。(五786-14 246-3) ○

みそつかす 「あの児はみそつかすですね」とつかはれる

(1171-9 169-11 170-1) ○

みだて (庭は) 見だてはないが箒が届いて涼しげである。

(11191-5 六106-3) ○

みづく 父も母も水漬(みづ)いてゐるやうに黙つてゐた。(七201-

2) みづみづ 麦は扱いたばかりなのであらう、粒がみづ／＼と大きく、(五302-1)

みてくれがし ことさらに見てくれがしな気もちでいる人もないだろう。(11293-8) * 田山花袋「春潮」

みのぼり (襖については) 箋貼りといふことばだけしか耳に残つてゐない。(1144-10)

みやくすず 「魚釣の鈴なんで、……脈鈴一ツでいゝんで」と答へた。(六176-7-8) * 幸田露伴「幻談」

みんなになる 炊いたばかりの御飯はみんなになつて、空のお櫃に(六179-8)

むきつけ 女中などからはづ／＼しいといふ評をむきつけに云はれた。(119-15 1216-11) ◎

むきな 無理にでつちあげようとする愚かさ、むきな若年の滑稽の努力である。(11349-11)

むきもの 尾鰭胸鰭いさぎよく、取合せのむき物よせ物、「やあれをどうする。」(11206-4) * 幸田文「父—その死」

むくおき いつかのやうにむく起きに顔相の変るやうなことはない。(六172-3)

むさい 父には精神的な頸ががつちりといつてゐるのに、小鬢は汚く、ま塩になつてゐた。(七205-9) ○

むしやぐる 「べづ／＼すつことねえ、菊の葉つばだあ。」ぢいさんがむしやぐつて来る。(11221-10) * 幸田文「糞土の墻」

むすばる 二人の心が何かの色彩を帯びて結ばつたといふ甘々ことでは(四229-5)

むすめだち 私はたゞ普通の娘立ちから嫁したが、(三1145-12) ◎

むやくしい いたづらに意を尽して無益しく、むなしく気を摧いて妄言となる。(11282-6)

むりから ヒレといへども時を失つたものに価値は無い。無理からに、ねばならぬといふのでないから、(11241-4) * 斎藤緑雨「門三味線」○

め (染香の著物) 何と云つても刃の十分でないもののお寒さはしやうがなく、(五173-7)

めいきゅう し、こりになつてゐるのは明らかなのに、それを明究してしまはないでおいで、(七97-9)

めがけ あるとき玉の盃をめがけにしたのを最後にして、私のぶつこはし屋がをさまるより一ト足早く、父の方があき

らめに行きついたのであつた。(1269-1)▽秋永辞典「未詳」とす。○

めくらさぐり その経験と人から聞いた話とを、盲ざぐりに配列してみた(1186-7)

めしょう 「自然はあまり大きい。おまへは眼性めしやうがよくないらしい。(1400-13) ○

めどとおし 糸と針を奪つたが、自分も眼鏡なしには不可能なめど通なめどとほしだ。(11428-5)

めはしがきく あんたは眼はしが利きいてるし、(5122-14) ○

めひきぞでひき 融通してきた五万は眼ひき袖ひきの大金なのである。(5149-3)

めみえ 目見えの女中だと紹介者の名を云つて答へ、(5448-19-3) ○

めより スフ蚊帳は緯糸たていとも経糸よこいとも目寄りがしたり、へばつたりして、(1753) *幸田文「父—その死」

もぎる (桑の実採りに) ア子ちゃんは夢中になつた、ひっぱつてはもぎつた。(1303-7)

もぐ 一郎さんは力いっぱいに竿さおをもぎとつたはずみによるけ、(1307-3)

もしび 台処の葭簾から漏れる燃し火は色衰へてちらくし、(1162-14)

もちおもり 不安もつしりと持ちおもりがしてゐた(256-2 1338-3 四180-10) ○

もちじめん おきのさんの持地面もちぢめんに、道路に削そぎとられたために(四157-9)

もやう ポートは本流へ流れこむ支流の落ち口に舳もやつてゐる。(1255-13)

もりつぶす 話をうやむやにひきのばすはうがい、と云ふので、盛りつぶすことになつた。(550-13)

もんばうら ネル裏——これを以前はもんば、裏うらといつた——(7331-10) ○

❖ や 行

やすてら 贅沢ぜいたくなんかかけらも含んでゐない安やすてらなたべもののだ。(1278-8 11)

やつれきぬ 羽根の塵ちり払はらひをつかへ、羽根の無いときにはやつれ絹をつかへ、(1117-12)

やのね 先代旦那さまが屋の根を護つてゐてくださるんです

よ (四一七)

やめる 月給とは跡腹の病めない安心な収入であった。(五
361-13)

やりてんぼう 私は若さのやりてんぼうを振りかぶつてゐた

ㄥ (三二一七〇-七 一三七三-六) ◎

やりぶる 「いやだわ、あんなにやりぶつて見せて」と多分
擧聲を買つてゐる。(四一七〇-五)

ゆたび 一家をひきつれて湯旅にも行けば、(五三〇〇-七)

ゆづら 薄い煙がふうつとあがつて、ゆるく湯づらを離れた。

(七一二七-一五)

ようほん 茶を飲んで更に一服、暫時してお経を誦む。要本
である。(一九-九)

よくせき 酒飲みも炊事もよくせき嫌ひだつたのだらう(二

96-10 201-8 三二四一-8) ◎

よくどおしい もつとかうなりたいあ、なりたいといふ慾ど

ほしきで気が休まらなかつた。(三三二一-七)▽秋永辞典の見

出しは「よくどつこつ」◎

よじお 春の夜潮のふくらみ、秋のあらしに近い淵の淀みな
どは、(一一三五-五)

よろう 顔のない影へ対して鎧よろいはうとして、げんは勉強が手

につかない。(七一一九-一五 一二四-三)

よろけじま 挽茶色のよろけ縞も紫色の葶の模様も赤い十の
字緋も、(三二九〇-一一) ○

❖ 行

らちくちない 芝居を見て来ると、あとはらちくちもなくば

んやりと思ひにふけた。(三二五九-一四) ◎

りかた ひまな時も抱へておかなくてはならない住込みより

利り方かたなのである。(五三三〇-八)

りようだめ こ、のうちもさきゆきもあんだを使つて行きた
いにきまつてるんだよ。い、から休みなさい。それが両りやうだめ為
になるつてもんだ。(五一六二-一〇)

りようる いま料ちつて鍋から揚げたといふ新鮮な皿を欲しが

つた。(二二〇四-八 二二四二-一四) ◎

ローズ 家事技術を向上させようとして、料理にはローズ材

料の損をし、(四一五八-九) ○

ろく こうげ板を使つて土をならし、穴を埋めてろくにする。
(一一五五-七) ◎

ロハニズム 父の俳句は随分父の色が濃い。そこを狙つてや

るのを、私はロハニズムとひそかに称してゐた。(1227-1
226-15 227-2)

❖ わ

わかあじ 料理には上手下手にかゝはらず、若味わかあじとふけ味がつくもののやうに思ふ。(六199-3)

わくせき 私がわくせき動乱してゐるうちにも、立像と坐像の烈しい問答が斬りあはされ、(二90-2)

わげる 足もとには縋わげた縄がニツ三ツと、よこれた手拭が落ちてゐた。(四333-4)

わさくさ 病人が病院に、うちには幼いもの一人、役に立つ自分は両方かけもちのわさくさしてゐると言いふ。(六378-5)
(2021.10.10 成稿)

(くどう・りきお 成城大学名誉教授)